

## 稲畑汀子の滑稽俳句（2）

小西昭夫

前回に続いて、稲畑汀子（敬称略）の俳句を見ていく。

### 庭師来て少し加へぬ春の土

庭師は剪定をしたり植木の枝を整えたり、時には消毒などもする。ところが、この句の庭師の仕事は春の土を少し加えただけ。この意外性が可笑しい。

### 一日は毛虫退治に庭師来る

毛虫退治だから、今度はちゃんとした庭師の仕事である。まさか一匹ずつ捕まえて退治するわけではあるまい。もちろん、目についた毛虫は捕まえて退治するだろうが、おそらく消毒である。しかし、消毒といえばよいものをわざわざ毛虫退治というところが可笑しい。こう表記すれば毛虫が印象に残る。毛虫の嫌いな人も多いだろうから、あえて「毛虫退治」としたところが可笑しい。汀子も毛虫嫌いかもしれないと思うと余計に可笑しい。

### 名園の一画にして茄子の花

名園というのだから、そこに茄子が植えられていることは誰も想像しない。しかし、茄子の花が咲いていたのだ。どこの名園かは分からないが名園に茄子の花が咲いていることがぼくたちの常識を裏切ってくれる。名園という非日常に茄子の花という日常が紛れ込んでいる可笑しさ。

### 好き嫌ひ有無を言はず鰻とる

汀子は鰻が好物なのだろう。来客があり、食事の時間が来た。とにかく最高のもてなしとして鰻をとるのだ。相手の好き嫌いには関係なく鰻を注文する。相手も鰻が好きだと信じ切っている。この人のよさや押しつけがましさが可笑しい。

### リハビリはこれでおしまひ鰻飯

この句も鰻である。腕か脚か、それともほかの箇所かは分からないがリハビリは辛い。が、これで終わりとなると俄然元気が出る。そのお祝いが鰻飯である。庶民的で、しかもちょっと贅沢という鰻飯が可笑しい。

### ふときつねうどん食べたし春寒し

ふと特定の何かが食べたくなくなることがある。ぼくの場合だと、おにぎりであったりお茶漬けであったりと特別な料理ではない。春寒の一日、ふと食べたくなくなったのは暖かいきつねうどんである。肉うどんや天ぷらうどんではなく、きつねうどんであることが可笑しい。きつねに騙された感じがするのだ。

### 寄鍋と聞けば出席することに

外は寒いし外出はおっくう。今度の会合は欠席しようと思っていたら寄鍋とすることである。それを聞いたら出席の意欲が湧いてきた。行かなくちゃあ。この現金さが笑える。胃袋をつかまれると人は弱い。